

つばきちんざん

椿 椿山展 軽妙端麗な色彩と筆あと

板橋区立美術館(西高島平) 23.03.18~04.16

前期 03.18~04.02 後期 04.04~04.16 (前後期で大幅展示替えあり)



「椿山」(1801~1854)は、江戸時代後期を代表する文人画家の一人で、はじめは幕府の下級役員を勤めながら絵師の「金子金陵」に師事していた。

その後は「渡辺華山」に学び、みずみずしい色彩と軽やかな筆致の花鳥画や肖像画などの制作に力を注ぎ、「華山」から陰影法等を採り入れた表現を受け継いで、独自に発展させ多くの人達に親しまれた。

作品は、写生に基づきリアルな質感表現を追求したものから、形にとらわれない大胆な筆使いのものまで、様々な作品を制作したのが特徴である。

特筆すべきは、画伯は江戸だけではなく地方からの注文を受け、その名は広く知られていて、現存作品の中で「花鳥図」の作品数は圧倒的に多いとされる。

《玉堂富貴・遊蝶・藻魚図》3幅(部分) (前期) 1840年 絹本着色 上図
玉堂富貴(ぎょくどうふうき)とは、玉(ぎょく)蘭(らん)白(はく)木(もく)蓮(れん)海棠(かいどう)牡丹(ぼたん)を組み合わせた南宋画の伝統的な画題の一つで、玉蘭と海棠は玉堂を牡丹は富貴を表わし、富裕の象徴とされ江戸の文人知に好まれた伝統的なモチーフを石版印刷で表現している。



《久能山真景図》重要文化財(後期) 1837年絹本着色

「真景図」は、特定の場所の写生に基づいた図に対して江戸時代の文人画家が用いた呼称である。本作品は、京都から江戸へ戻る途中に久能山を訪れスケッチを基に描かれたもので「花鳥画」を得意とした画伯の珍しい風景画である。

《渡辺華山像》重要文化財 1853年 絹本着色

作品は、当初恩師「華山」の一周忌に向けて描き始めたものの、悲しみのあまり筆が進まず完成したのは13回忌の時であるという。体に比して大きな右手が、螺鈿が施された机から飛び出すように描かれているのは、だまし絵的な臨場感に溢れ肖像画としては珍しい現象であるとされている。(作品は略)